

都市の開発に「農」の空間を

NPO 法人幸まちづくり研究会

代表理事 千葉美佐子

●活動の背景と目的

川崎市幸区の真ん中に位置する新鶴見操車場跡地(市域約33ha)は、1984年に廃止となり、その後の再開発をめぐり、1991年に市の大規模公共事業計画(案)に対し、市民から計画の白紙撤回を求める運動が起き、財政難もあって長いこと放置されたままだった。



当研究会は、市民主体でまちづくりをすすめようと1996年に「まちづくりわいわいクラブ」として発足し、私たちの街の未来を考えるため歴史調査「操車場の昔と今」やワークショップを行った。

首都圏の物流拠点として京浜工業地帯の発展に寄与してきた歴史ある土地だったが、その一方では国策により緑豊かな田園地帯は破壊され、村や神社の移転で「祭り」や「市」などの文化やコミュニティも失われるなど、市民生活に大きな影響を与え、その傷跡は今も残っていることを知る。

そこで、取り戻したい「自然環境の復元や歴史・文化の継承、分断されたコミュニティの再生」を市民主体で実践していこうと、翌年1997年には、暫定利用として川崎市が市民・企業・行政の協働で地域環境の改善を行うグラウンドワーク事業「花のふれあい花壇」に応募し、「農のあるまちづくり花壇」を実践地として活動。

そこに参加したグループとともに維持管理組織「新川崎ふるさとづくりの会」を立ち上げ、1998年には、花だけでなく、実もなり、収穫して食べるまでを体験できるアグリガーデン(体験農園)や、土や緑を通して高齢者や障害を持つ人も関わられるコミュニティガーデンの提案をし、市と協働で資材確保から整備作業までを企業や地域の協力で行った。

実践活動を通して、都市にこそ「農」のあるまちづくりが必要と実感し、暫定ではなく次の世代も享受できる自然と人、人と人が共生する都市をめざして、市民から提案していこうと1999年に「幸まちづくり研究会」に改名。地域課題や市民要望をまとめた地区カルテを作成しワークショップやフォー

ラムを開催し、2001年に持続可能な環境共生都市を創る「市民整備構想提案書」を市長に提出。

現在は市民提案の具体化を図ることを目的に、新川崎ふるさとづくりの会の花壇を実習地として、親子で土に触れ、野菜の種まきから収穫するまでを楽しみながら参加・体験し、地域の人々と交流する「農」の体験学習「アグリガーデン(体験農園)」を企画・実施している。

活動のコンセプトは

- ①土や植物、虫と触れ合う「農」体験や観察会、収穫祭を通して、地域の人々と交流を図り、自然との関わり方や食文化を知る環境教育の実践の場とする。
- ②採れた野菜を調理し収穫祭を祝い、地域の人々の「知恵や技術を活かして「食文化」を楽しむ。
- ③「持続可能な環境」を基本コンセプトに土作りや手入れを行うこと。



●活動の内容

- ①企画：「アグリガーデン(体験農園)～川崎生まれの万福寺人参やだいこんを育て、トン汁収穫祭を!～」
- ②募 集：親子10組
- ③参加者：障害をもつお子さんと親の会より7組。収穫祭のみは3組でフィリピン移住女性を支援する団体の親子6組も参加
- ③第1回：大根種まき、春菊・ブロッコリー植付け、観

察会、看板作り（雨天順延で紙芝居）

第2回：草取り、サツマイモ収穫体験、看板づくり

第3回：大根の収穫、ラズベリーの苗を植樹、土入れ、

収穫祭（ボランティア含め70人参加）

⑤アドバイザー：片平楽農倶楽部の三浦氏、佐々木会員

⑥協力：土作り・竹材のガーデン準備）JR貨物労組
新鶴見機関区、紙芝居、トン汁準備）地域ボランティア



今回の企画にあたり、日頃地域との交流ができにくい状況にある障害をもつ親子サークルやフィリピン移住女性の自立支援を行う団体と連携し収穫祭を行った。今年とは別の花壇で、「イモ食ってぷー」サツマイモを育て収穫して食べる企画を多文化共生の花壇としてフィリピン移住女性たちの親子を対象に行う。

大根ガーデンの準備作業として土入れをしたが、その土は行政の協力で開発で発生した土をリサイクル。

●運営や体制

運営主体は、当研究会のアグリチームで企画・募集、日常の水やりなどの維持管理を行なっている。操車場跡地は地面は固く、竹材で大根ガーデン準備や土入れ、堆肥運びなどの作業を行ったが、協力団体の JR 貨物労組新鶴見機関区の皆さんの支援がなければできなかった。また今回は、天候に恵まれず小雨対策でテントの中で紙芝居を、ボランティアの保育園の先生からやってもらったが大変好評だった。

何か必要なことがあれば、地域でできる人を探し、参加を拡げることがこの企画、実施を成功させる鍵だ。

花の苗は、川崎市から年2回配布されるが、苗代や肥料、資材等にかかる必要経費は参加者から徴収している。企画・実施のためのコーディネーターや事務局に対する費用や日常の水やりなどの維持管理にかかる費用は含まれていない。

●地域との関わり



●今後の課題

幸区は緑が少なく農地もごく僅か学校農園もない。コンクリートジャングルで暮らす子どもたちにとって、遊びや土づくり、作物の生育を通して、太陽や雨、微生物など自然との関わりや大切さに気づき、感謝する心や「命」を大切に作る心を育てる「食」や「環境」教育の場が身近に必要。

また、工場跡地のマンション建設が急増し、核家族で子育てしているお母さんたちは「1日夫以外の大人と話さない日もある」という。また、越したばかりであり笑わなかったデイサービスの利用者さんが、ネイチャーフェスティバルのガーデンニング講習会で土に触れ、ハーブを植えたりしたことと笑顔が戻り明るくなったという。地域とのつながりが薄く閉じこもりがちの人々が緑を介して地域の人と交流できるたまり場づくりが必要だ。

一方で、定年後の人は地域で何か役に立つことをしたいと緑化活動に参加する人が増えている。また、企業は社会貢献活動（CSR）として地域の環境再生活動に積極的に参加する動きがある。

今後は、地域にある様々な資源を活かし、子どもたちが地域のひとと「農」体験などを通して交流し、「知恵」や「生きる力」を学べる生きた社会教育のたまり場づくりをすすめたい。

そして、ここを訪れるようになった高齢者や子どもづれ、外国人市民、犬の散歩の人などが花や実、虫などを介して会話ができて、作物の成長を日常的に見たり感じたりすることで「心が癒される」など、地域の誰もが集い・憩い・「幸せ」を感じられる「農」の空間を都市につくっていききたい。